

「五千人の給食（前篇）」

マルコの福音書 6:30～38

はじめに

今日の箇所は、「五千人の給食」と呼ばれる、イエシュアがたった五つのパンと二匹の魚で、男だけで五千人（女性や子どもも合わせるとおそらくその倍以上の人数）の空腹を満たしたという奇蹟が記された箇所です。今日はその前篇になります。この出来事は、マルコの福音書では 6:7 でイエシュアが十二人の弟子たちを二人一組にして遣わされ、その宣教の働きから弟子たちが再びイエシュアのもとに戻って来た、その後に起こった出来事として記されています。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:30 さて、使徒たちはイエスのもとに集まり、自分たちがしたこと、教えたことを、残らずイエスに報告した。

6:31 するとイエスは彼らに言われた。「さあ、あなたがただけで、寂しいところへ行って、しばらく休みなさい。」 出入りする人が多くて、食事をとる時間さえなかったからである。

6:32 そこで彼らは、自分たちだけで舟に乗り、寂しいところに行った。

6:33 ところが、多くの人々が、彼らが出て行くのを見てそれと気づき、どの町からもそこへ徒歩で駆けつけて、彼らよりも先に着いた。

イエシュアに遣わされた弟子たちは、与えられた権威（マルコ 6:7）によって立派に「使徒」としての務めを果たしたようです。彼らはイエシュアにその報告をするため、再び集まりました。するとイエシュアは、今度は「寂しいところ」で「休みなさい」とお命じになります。彼らは従い、舟に乗り込みます。ところがそれに気づいた「多くの人々」の方が、結果的に使徒たちよりも先にその場所に到着してしまったという出来事が記されています。この場所「寂しいところ」で使われているヘブル語、ホルバー(הַרְבֵּי)は本来「廃墟」という意味で使われており、その最初の言及であるレビ記 26:31 から、イスラエルの民が神に聞き従わず、その町々が廃墟となることを指し示した言葉であると考えられ、この廃墟と化した町々に、「多くの人々」が集まるという出来事に、今日のイスラエルの状況が表されていると考えられます。AD70 年にローマによって国を滅ぼされたイスラエルの民は、世界中に離散させられることとなりました。しかし AD1948 年にわずかに国土を取り戻した彼らは、散らされていた世界各地から続々と帰還し始め、今日もなお増え続けています。しかし首都エルサレムの神殿は未だ破壊されたまま、つまりホルバー、廃墟のままなのです。つまりこの「多くの人々」とは、今日のイスラエルに帰還している民、ユダヤ人を表した「型」だと考えられます。では「使徒たち」についてはと言いますと、彼らは「寂しいところ」に行くために、まず「舟」、ヘブル語でオニツヤ(הַיָּם)に乗ったとあります。この言葉の最初の言及は創世記 49:13 です。

【新改訳 2017】 創世記

49:13 ゼブルンは海辺に、船の着く岸辺に住む。その境はシドンにまで至る。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルがその十番目の息子ゼブルンを祝福した言葉ですが、そのゼブルンという名前に結びつくようにして用いられているのが聖書で最初のオニツヤー「舟」です。ゼブルンという名には「尊ぶ、高く上げる」そして「～と住む」という意味があります（創世記 30:20）。ですから使徒たちが、そしてイエシュアが「寂しいところ」に行くその前に「舟」オニツヤーに乗ったという記述には、イエシュアとともに高く上げられ、天においてともに住むという、「教会の携挙、イエシュアの空中再臨」が、イエシュアが「寂しいところ」イスラエルの町々に行かれる前に起こる、すなわち地上再臨の前にそれが起こることが指し示されていると考えられます。ですからここでの「使徒たち」とは、イエシュアの地上再臨の前に携挙される、私たち教会を表していると考えられます。

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:34 イエスは舟から上がって、大勢の群衆をご覧になった。彼らが羊飼いのいない羊の群れのようにあったので、イエスは彼らを深くあわれみ、多くのことを教え始められた。

そして「舟」を降り、群衆の前に来られたイエシュアのこの姿には、イエシュアの地上再臨の出来事が「型」として表されていると考えられます。ここでまずイエシュアは「群衆をご覧になった」とありますが、ここに使われている「見る」という意味のラーア（הִבִּיטָה）は本来、その最初の言及である創世記 1:4 から、神が目を留め、選び分けるといった意味を持った言葉であり、この群衆に表されたイスラエルの民こそがイエシュアにとって、すなわち神にとっての選びの民であることが、ここに表されていると考えられます。

また「イエスは彼らを深くあわれみ」ともありますが、これは腸（はらわた）、女性で言うならば子宮が震えるほどの思い、まさに断腸の思いを表しており、それは神の目には、イスラエルの民が「羊飼いのいない羊の群れのように」、自分たちの飼い主を呼び求めて鳴いている、いや泣き叫んでいる羊たちのように見えるからです。ここに神のイスラエルに対する愛とあわれみの大きさ、深さ、強さが表されています。

そしてイエシュアは彼らに「多くのことを教え始められた」とあります。「教える」という意味のラーマド（לָמַדְתִּים）、この最初の言及は申命記 4:1 です。

【新改訳 2017】 申命記

4:1 今、イスラエルよ、私が教える掟と定めを聞き、それらを行いなさい。それはあなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、【主】があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。

ここで「私が教える掟と定め」と訳されている箇所には聖書で最初のラーマドがあります。そしてそれは「あなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、【主】があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。」と明示されています。これがラーマドの持つ本来の意味とその目的であると考えられ、イエシュアはイスラエルの民に「【主】が…与えようとしておられる地」を所有させるためにこの地上に再び来られるということが、この「イエスは彼らを深くあわれみ、多くのことを教え始められた。」という記述の中に「型」として神のご計画が表されていると考えられます。

以上、少し長くなりましたが、これらの出来事とそこに込められた神のご計画を踏まえながら、次に記された「五千人の給食」の奇蹟を見てまいりたいと思います。

1. 遅い時刻

【新改訳 2017】マルコの福音書

6:35 そのうちに、すでに遅い時刻になったので、弟子たちはイエスのところに来て言った。「ここは人里離れたところで、もう遅い時刻になりました。

6:36 皆を解散させてください。そうすれば、周りの里や村に行って、自分たちで食べる物を買うことができるでしょう。」

6:37 すると、イエスは答えられた。「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」弟子たちは言った。「私たちが出かけに行って、二百デナリのパンを買い、彼らに食べさせるのですか。」

「そのうちに、すでに遅い時刻になった」とあります。ここに「日が暮れる」という意味のラーファー(הָרַף)という言葉が使われていますが、これは本来、「神に赦される、解放される」という意味で使われた言葉です。

【新改訳 2017】出エジプト記

4:24 さて、途中、一夜を明かす場所でのことだった。【主】はモーセに会い、彼を殺そうとされた。

4:25 そのとき、ツイポラは火打石を取って、自分の息子の包皮を切り取り、モーセの両足に付けて言った。「まことに、あなたは私には血の花婿です。」

4:26 すると、主はモーセを**放された**。彼女はそのとき、割礼のゆえに「血の花婿」と言ったのである。

これは預言者モーセが、なんと神に殺されそうになるという場面です。なぜそのようなことになったのかという理由についてはまた別の機会にしたいと思います。モーセにとっては危機的状況でしたが、妻ツイポラの上記の行為によって「主はモーセを**放された**」とあり、ここに聖書で最初のラーファーがあります。このように、ラーファーには本来、神によって殺されそうになるが、神によって救われるというような意味があり、この「そのうちに、すでに遅い時刻になった」とは、単なる状況説明ではなく、「人里離れたところ」これは先ほどの6:31での「寂しいところ」と同じ場所ですから今日のイスラエルの国、国土を指しているとして、そこに集まった群衆、すなわち今日のイスラエルの民、ユダヤ人たちを、一度は殺そう、滅ぼそうとされるが、これを神はついには赦される、救われるということが表されていると考えられます。実に彼らはその歴史の中で、何度も何度も絶滅の危機に瀕してきました。そして世の終わりにはこれまで以上の最大の危機に直面することがイエシュアご自身によっても預言されています。

【新改訳 2017】マタイの福音書

24:13 しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。

24:21 そのときには、世の始まりから今に至るまでなかったような、また今後も決してないような、大きな苦難があるからです。

このように、最大最悪の苦難を経て、「最後まで耐え忍ぶ」イスラエルの民、ユダヤ人たちは救われるという神のご計画が「そのうちに、すでに遅い時刻になった…」という言葉から始まる状況説明の中には表されていると考えられます。

また弟子たちがイエシュアに「皆を解散させてください」と言ったということも記されていますが、ここに使われているシャーラハ(חֲלָה)は本来、創世記 3:22 で最初に使われ、永遠の命を得るために「手を伸ばす」という意味を持った言葉です。ですから弟子たちのこの要望の言葉には「イスラエルの民に永遠の命を得させてください」という願いが込められていると考えられます。

そしてイエシュアは弟子たちに「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」と言われました。「あげなさい」という箇所使われている「与える」という意味のナータン(נָתַן)、これは本来、創世記 1:17 で神が大空に太陽を創造され、そして地上を照らさせるために「置いた」という意味で使われた言葉です。また「食べる物」、「食べる」という意味のアーハル(אָחַל)は、神が人に与えられた最初の命令に関わる言葉です。

【新改訳 2017】創世記

2:16 神である【主】は人に命じられた。「あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。

2:17 しかし、善悪の知識の木からは、食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」

神が「食べてよい」と言われるものを食べ、「食べてはならない」と言われるものを食べない、つまり神の命令を守り、神に聞き従うこと、アーハルは本来、そのような意味を指し示す言葉であると考えられます。ですから「あなたがたが、あの人たちに食べる物をあげなさい。」というイエシュアのこの言葉は、実行不可能な無理難題を押し付けられたのではなく、「あの人たち」すなわちイスラエルの民に地上を支配させ、地上のすべての人々が神の命令を守り、これに従うようにさせよ、いやそのようになるという神のご計画が指し示されていると考えられます。

このように、「人里離れたところ」に集まった人々、群衆の中に表されたイスラエルの民が、神のご計画において、すなわち「神の国」において、後にどのような状態、存在になり、そしてどのような役割、働きをしていくのかということがここには表されていると考えられます。ちなみに弟子たちは「二百デナリのパンを買い、彼らに食べさせるのですか。」と言っていますが、これはもし 200 日分の給料で買ったパンがあっても足りない、そもそもそんな大金などどこにもないという意味です。なぜここで弟子たちは「二百デナリ」と言ったのでしょうか。色々な説が考えられますが、聖書の中に 200 という数字にまつわるいくつかのエピソードがあります。

【新改訳 2017】士師記

17:4 彼が母にその銀を戻したので、母は銀二百枚を取って銀細工人に与えた。銀細工人はそれで彫像と鑄像を造った。こうして、それはミカの家にあった。

この箇所から考えられるのは、200 は彫像と鑄造、つまり偶像の神々を指し示しているということです。つまり偶像、人間や人間が作った神々では「足りない」、神のご計画を成し遂げることができない、そもそも必要ない、あってはならないということです。次にこのような記述もあります。

【新改訳 2017】 I サムエル記

18:27 ダビデは立って、部下と出て行き、ペリシテ人二百人を討って、その陽の皮を持ち帰った。

またこのように、200 はペリシテ人、すなわちイスラエルの敵を指し示しているとも考えられます。イスラエル、ユダヤ人に敵対するような、イスラエル、ユダヤ人を無き者とする、ないがしろにするような考え方では、神のご計画は成し遂げられないということです。またこのような記述もあります。

【新改訳 2017】 II サムエル記

14:25 さて、イスラエルのどこにも、アブサロムほど、その美しさをほめそやされた者はいなかった。足の裏から頭の頂まで、彼には非の打ちどころがなかった。

14:26 彼は毎年、年の終わりに、頭が重いので髪の毛を刈っていたが、刈るときに髪の毛を量ると、王の秤で二百シエケルもあった。

そして 200 はダビデの子アブサロムに象徴される「偽メシア、反キリスト」を指し示しているということです。髪は人の頭にあり、頭は考え、計画を持つ機関です。アブサロムの考えはイスラエルを騙し、ダビデを倒し、自分が王になろうとする企みです。このアブサロム的な考え方、計画では、神のご計画は成し遂げることにはできない、いやそもそもあってはならないということです。ちなみに「頭」を象ったヘブル文字レーシュ(ר)には、200 という数字が宛がわれています。

このように、偶像の神々や反ユダヤ主義、反キリストでは神様のご計画に対抗するには「足りない」、太刀打ちできない、いやそもそもこのような存在が「神の国」にはあってはならないということがこの「二百デナリのパンを買い、彼らに食べさせるのですか。」という言葉にはこめられていると考えられます。メシアであるイエシュアと、それに従うイスラエルの民、そして教会だけが神様のご計画を実現させるに足るものなのです。

2. 五つのパン

【新改訳 2017】 マルコの福音書

6:38 イエスは彼らに言われた。「パンはいくつありますか。行って見て来なさい。」彼らは確かめて来て言った。「五つです。それに魚が二匹あります。」

五つのパンと二匹の魚、これが指し示す意味について改めて考えます。まず五つのパンについて。

【新改訳 2017】 創世記

1:20 神は仰せられた。「水には生き物が群がれ。鳥は地の上、天の大空を飛べ。」

1:21 神は、海の巨獣と、水に群がりうごめくすべての生き物を種類ごとに、また翼のあるすべての鳥を種類ごとに創造された。神はそれを良しと見られた。

1:22 神はそれらを祝福して、「生めよ。増えよ。海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ」と仰せられた。

1:23 夕があり、朝があった。第五日。

神の天地創造の御業の「第五日」、この日は「神はそれらを祝福して」とあるように、神が祝福するという行為を聖書で初めて行われた日です。ですから「五」という数には神の祝福という意味があると考えられます。またパンのことをヘブル語でレヘム(לֶחֶם)と言いますが、もともとは「糧」という食物全般を指す意味で使われました。

【新改訳 2017】創世記

3:18 大地は、あなたに対して茨とあざみを生えさせ、あなたは野の草を食べる。

3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」

「顔に汗を流して糧を得」とあり、レヘムとは本来、労働、労苦によって得るものという、苦しみを指し示すものであると考えられます。ですから「五つ」の「パン」には、「苦しみを通して得る神の祝福」というような意味、メッセージが込められていると考えられ、先ほど述べたマタイ 24:13「最後まで耐え忍ぶ人は救われます。」という、大きな患難を通して救いに至るイスラエルの民、ユダヤ人たちの姿がそこには表されていると考えられます。

3. 二匹の魚

次に二匹の魚について考えます。

【新改訳 2017】創世記

1:6 神は仰せられた。「大空よ、水の真ただ中であれ。水と水の間を分けるものとなれ。」

1:7 神は大空を造り、大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた。すると、そのようになった。

1:8 神は大空を天と名づけられた。夕があり、朝があった。第二日。

神の天地創造の「第二日」。この日は神が「大空の下にある水と大空の上にある水を分けられた」日です。つまり水の一部は分けられて上に上げられ、また他の一部は下に残されたということであり、先にも述べた教会の携拳の出来事が表されていると考えられます。また「魚」は本来、以下のように記されました。

【新改訳 2017】創世記

1:26 神は仰せられた。「さあ、人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう。こうして彼らが、海の魚、空の鳥、家畜、地のすべてのもの、地の上を這うすべてのものを支配するようにしよう。」

このように、「魚」とは本来、神の似姿である「人」の支配を受けるものの筆頭として記されています。教会は携拳される、天に上げられるような、メシアの花嫁とも呼ばれるほどの存在ですが、地上に完成される「神の国」はあくまでもアブラハムの子孫である彼らイスラエルによって祝福される世界です（創世記 28:14）。イスラエルに繋がる、結びつくことによってのみ祝福されるのですから、この「**それに魚が二匹あります。**」という言葉には、携拳され、やがて「神の国」においてイスラエルに繋がることで祝福を受ける教会の姿が表されていると考えられます。

この五つのパンと二匹の魚についての解釈は、この限りではなく、本当に多くの説が存在します。これは神のご計画としてこれから後に起こる出来事、やがて建て上げられる「神の国」という実際の存在に焦点を当てた場合の解釈であって、これのみが真理であるとは言いません。しかし私たちがもし目の前のことだけ、自分の身の回りのことだけに心を奪われているとしたら、そして心を悩ませているとしたら、この解釈は受け止める必要がある、聞かなければならない福音です。私たちはこの二匹の魚に表された、携拳される教会です。そしてその携拳とは以下のような出来事です。

【新改訳 2017】 I コリント人への手紙

15:50 兄弟たち、私はこのことを言うておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。

15:51 聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠るわけではありませんが、みな変えられます。

15:52 終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに変えられます。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

15:53 この朽ちるべきものが、朽ちないものを必ず着ることになり、この死ぬべきものが、死なないものを必ず着ることになるからです。

15:54 そして、この朽ちるべきものが朽ちないものを着て、この死ぬべきものが死なないものを着るとき、このように記されたみことばが実現します。「死は勝利に呑み込まれた。」

15:55 「死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。死よ、おまえのとげはどこにあるのか。」

15:56 死のとげは罪であり、罪の力は律法です。

15:57 しかし、神に感謝します。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

このように携拳とは、「死ぬべきものが死なないものを着る」という出来事であり、人の最大の悩み、問題、恐れの的である「死」からの解放、イエシュアによってもたらされる、「死」への勝利なのです。私たちが日々抱えている悩みや問題はすべて、突き詰めればこの「死」に当たります。ですがこの福音を受け入れるなら、信じるならそれは完全に解決されます。その時は確実に近づいています。待ち望みましょう。私たちの心と思いが、ますますこの福音、「教会の携拳」に対して向けられるものとなっていきますように。